

社会包摂デザイン・イニシアティブ2024 年度活動報告

知足，美加子
九州大学大学院芸術工学研究院メディアデザイン部門

尾方，義人
九州大学大学院芸術工学研究院未来共生デザイン部門

中村，美亜
九州大学大学院芸術工学研究院未来共生デザイン部門

長津，結一郎
九州大学大学院芸術工学研究院未来共生デザイン部門

<https://doi.org/10.15017/7343509>

出版情報：芸術工学研究. 40, pp.52-62, 2025-03-31. Faculty of Design, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



研究センター報告

社会包摂デザイン・イニシアティブは、2021年4月に「ソーシャルアートラボ」の取組を継承発展する後継組織として設置されました。特に2021～2023年度は「多様性のある包摂型社会の『しくみ』」をデザインする先導的研究拠点の整備事業として、幅広い活動を展開してきました。2024年度は、これまでの研究プロジェクトや授業を継承しつつ、発展させる取組を行いました。

研究プロジェクト

1. 災害後の森林環境と人間をつなぐ芸術文化的実践
2. 婚姻制度によりそう展
3. 木育サミット in 福岡あさくら
4. 認知症ケアの場における芸術活動

授業

1. 身体表現演習特講／アーツマネジメント特論
2. スタジオプロジェクト I-B、II-B
3. スタジオプロジェクト III-B、IV-B
4. 創造農村デザイン演習／創造農村デザイン応用演習

社会包摂デザイン・イニシアティブ (DIDI)

1. 理念

社会包摂とは、障害、性、国籍、貧困などの理由で社会から疎外されてきた人たちを含めた、あらゆる人たちの存在が尊重される社会のあり方を指す。このような包摂型の社会を実現するためには、従来とは異なる方法で、もの・こと・サービス・社会制度を「仕組み」としてデザインし、社会実装していくことが不可欠である。DIDIは、多様なニーズに応じたサービスを提供し、個人のポテンシャルを引き出すための「仕組み」をデザインすることで、健全な成長や、豊かさの新しい価値を生み出す社会づくりを先導する研究教育機関である。

*デザインは、日本では「色や形の工夫」と狭義に理解されることが多いが、元来「設計と計画」を意味し、思考の枠組みやコンセプトを設計・再設計しながら、もの・こと・サービス・社会制度などを創造・再創造する行為を指す。

2. ミッション

DIDIは、研究者どうしの連携を促進し、産学官民のハブとなるシンクタンクの役割を担う組織となることで、もの・こと・サービス・社会制度等から構成される地域社会のケアや雇用等の「仕組み」を、包摂型社会という新しい理念のもとで一体的にデザインし、それを適切に運用することを目指す。

そのため、DIDIでは、研究・教育・実践・提言の相互連関をつねに意識し活動を行っている。

- 研究:異なる分野の研究者どうしの連携を密にしながら、課題の背景にある「仕組み」にアプローチする研究を推進する。
- 教育:課題を生み出す「仕組み」を理解し、新しい視点から解決に導くデザイン提案ができる人材をさまざまな形で育成する。
- 実践:包摂型社会という新しい理念のもとで従来の「仕組み」を再デザインし、社会実装する。
- 提言:研究・教育・実践で得られた知見をもとに、包摂型社会を実現するためのデザイン提言を積極的に行う。

災害後の森林環境と人間をつなぐ芸術文化的実践 ー文化継承の森づくりー

近年、気候変動による豪雨や山火事等の自然災害による環境破壊が頻発している。九州北部の英彦山分水嶺^{ひこさん}の領域では、復興半ばで頻発する豪雨災害が森林環境への不信感を生み離村率を高めている。復興活動のうち、被災地の自然環境と人間の関係性再生についての動きは少ない。そこで本研究は能動的に森林環境との心理的關係性を繋ぎ直すファクターとして芸術文化に着目する。本稿は1. 復興における森林と芸術文化の関係についての聞き取り調査。2. 森林の遺伝的系統と修験道文化に基づく価値創造。3. 三連水車を未来につなぐ文化継承の森づくり。4. サンゴの生命の樹プロジェクトの進捗について報告するものである。

1. 復興と芸術文化の関係についての 聞き取り調査

災害や公共事業等を契機に、自然の循環や伝統文化の継続に向き合うことになった地域を対象にフィールドワークを行った。

(1) チコロナイ活動とアイヌ文化(北海道平取町二風谷):

貝澤耕一、貝澤太一

北海道沙流郡平取町二風谷^{にぶたに}は、アイヌ民族の占める割合が住民の約7割となる地域である。アイヌ民族2名による審査請求(1989年)に始まった「二風谷ダム」への抗議は、アイヌ文化と治水、自然環境についての議論の契機となった(1997年に裁判は敗訴したが、判決文においてダムの違憲性とアイヌの先住性が認められる)。裁判原告の故・貝澤正は、治水力を高めアイヌ文化を育み、「森林本来のあり方」を取り戻すための森づくりを始める。息子の貝澤耕一(図1)は「ナショナルトラスト・チコロナイ」として本活動を引き継ぎ(1994年、2001年からNPO法人)、2020年からは孫の貝澤太一が受け継いでいる。耕一は、多様な関わりを生み出し続ける仕組みや場づくりに注力し、自然や人の主体性を重んじている。「面白いから関わる」という参加者の自発性を引き出し、特に子どもたちが自由に森で遊ぶことを重視している。貝澤太一は「アイヌの根本的な考え方は“森の声を聴く”。結局はこの森を見ながらやっていくしかない」と語った。両氏はアイヌ文化にあてはめて作作的に森をつくるのではなく、「森が戻りたい本来の姿になるための手助けをする」という意識で行動している。自然の森から生み出される生活や創造こそがアイヌ文化ではないか、という考え方である。

(2) 中越地震と角突き(新潟県長岡市山古志): 山古志闘牛会

2004年10月23日、新潟県中越地方を震源とする震度7の中越地震が発生した。復興のシンボルとなったものに牛の「角突き」(図2、国重要無形民俗文化財)がある。震災から20年の記念行事に際し、山古志闘牛会副会長の関正史、会長の松井富栄(故・治二会長の息子)に聞き取りを行った。旧山古志村(現長岡市山古志)は震災後に全村避難となり、飼育していた闘牛や錦鯉を置いていかなければならなかった。松井親子と関は、震災から1週間後

に体力のある闘牛たちを危険な山道を曳いて救出した。震災から半年も経たない避難生活の中、松井治二は「いつも通り(初場所を)やらなかったら駄目だ」と言い、仮設の闘牛場づくりに取りくんだ。災害後まもない角突きは、傷ついた住民の感情を鼓舞し、「関係性の中で生かされている」(中動態)という気づきをもたらしたという。「うちらが守ったというよりも、この牛たちに守られているんだよなあと。伝統文化、祭りはやっぱ窮地に陥った時、必ずその人の力になるもんだというふうに思ったね」と関は語る。山古志では、「生きるもの(角突き牛)」を核とした感動の共有が、災害後の地域内外のコミュニティを再生・継承する動機となっていた。



図1 「チコロナイの森と貝澤耕一」2024年

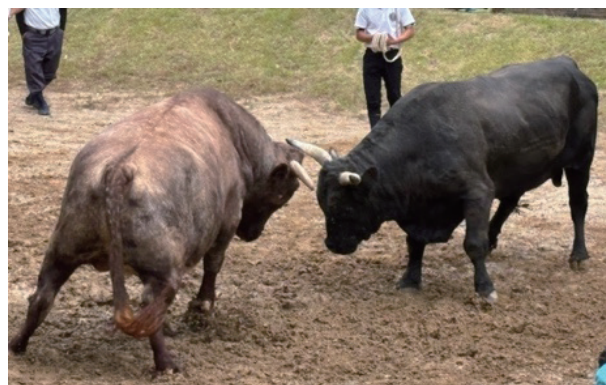


図2 「中越地震20年追悼の角突き」2024年



図3 「村上タカシと被災物」
2024年



図4 「被災樹木と旧・門脇
小学校」2024年

(3) 東日本大震災(宮城県石巻市、福島県いわき市):

村上タカシ、安藤邦廣

2011年3月11日、東日本大震災が発生し宮城県北部で最大震度7、最大潮位9.3m以上の津波が記録された。宮城教育大学教授の村上タカシ(図3)は、震災から1ヶ月経ったころ、災害記憶を伝承するアートプロジェクト「3.11 メモリアルプロジェクト」を始めた。この活動(MMIX Lab)には「残す(被災物の保存)」「示す(桜プロジェクト)」「伝える(メモリアルキャラバン)」の3つのフェーズがある。桜プロジェクトは、津波の遡上ラインにそって「山桜」を植えていくもので、「そこまで行けば津波から逃げられる」という安全の道標となっている。この他「再生のイメージ」を与える樹木のひとつに、震災遺構・旧門脇小学校の「被災樹木」(図4)がある。津波火災により焼けたイチヨウの根本から葉が伸び、現在青葉が繁茂している。震災の爪痕がのこる教室や被災物に言葉を失った人々は、「生き続ける樹木」から希望を受け取るという。

福島県いわき市に板倉構法の仮設住宅(図5)を建てたのは建築家・安藤邦廣(図6、筑波大学名誉教授)である。板倉はスギの無垢材で構成される伝統的木造建築である。安藤は阪神大震災の反省から、次の災害を視野に入れ毎年使う板倉用のスギ板を乾燥しストックできる体制を整えていた。そのため、発災後すぐに板倉仮設住宅の設計等を被災地に提出できた。素材は間伐材を用いており、木を「使う」こと自体が森の整備、ひいては災害に強い森づくりにつながるという。間伐材を使うことで森を形成することは、彫刻のカービングの概念に近い。仮設住宅の木質化は地元の建設業等への経済効果に加え、解体後の資材がゴミにならず復興のインフラとなる。実際に任を終えた福島の仮設住宅解体が進む中、西日本豪雨災害(2018年)が起こったため、48戸の仮設住宅が岡山県総社市に移築されている(後に26戸を市営住宅として再々利用)。安藤は森と建築(芸術)の関係について、「山の姿を写している建築は美しいと思いますね。森の持続が人間の生命を守ってきたわけだから。建築家は森を見て建築する“森のデザイナー”であるべき。持続を可能にするには共有が必要。感情を共有するために、芸術や祭りがある」と語る。災害後、安藤は宮城県鳴子市の「鳴子こども園」(図7)の改修も手がけて



図5 安藤邦廣、里山建築研究所《板倉仮設住宅》いわき市、
2011年



図6 「安藤邦廣」2024年



図7 「鳴子こども園」

いる。木の間伐から子ども達に立ち会ってもらい、合意形成しながら10年かけて建設している。「成長過程において森の心地よさを体感させることが重要」と安藤は考えている。

(4) 九州北部豪雨災害(福岡県朝倉市):

寒水地区、あさくら観光協会、美奈宜神社

福岡県朝倉市は2017年、2018年、2023年とくり返し豪雨災害に見舞われている。被災者である満生直樹(寒水区長)、里川径一(あさくら観光協会)、内藤主税(図8)(美奈宜神社宮司、7月に急逝)に聞き取り調査を行った。2017年の九州北部豪雨災害の際、寒水は甚大な被害に見舞われつつ死者をださなかった。しかし再建した家屋が再び被災し、離村を決意する被災者も多いと満生は語る。そこで筆者は、災害で流れた祠(赤堂)を被災木によって寒

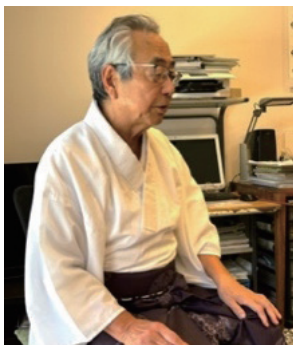


図8 「内藤主税」2024年



図9 「杓形餅づくり」美奈宜神社資料

水地区に再生する計画に協力している。里川は、河岸の復旧工事が進む中「川との関わりや、景観こそが宝物だったと気づいた。安全のためと言われたら、残してほしいと発言できなかった」という地域の声を聞いた。「平時にこそ、災害後の復旧工事において何を残すべきか、その優先順位を地域で話し合っておくべきだ」と里川は強調した。故・内藤主税が宮司を兼任した神社の中には、避難認定解除後も戻る住民がいない地区の社もあった。内藤は、黒川高木神社の宮座行事(国指定無形民俗文化財)の規模を縮小し続けた。そのひとつ「杓形餅づくり」(図9)は6本のカシの杵でつくが、杵の素材の杜が被災し採取が困難となっている。内藤に災害後の自然環境への感情の変化について質問したところ「逆に自然に対して畏敬の念を持ちました。自然の中で生かしていただいているのを改めて感じたというか。自分たちがどうできるような存在ではない」と答えている。信仰の根源には、自然への「感謝」と共に「畏怖」があることが窺える。

以上のフィールドワークを通して、森林を観察し体験すること、および木を使うことで「森をデザイン」する重要性が示された。また自然に関わる伝統文化や信仰における継続性や感情の共有が、コミュニティの再生に繋がることが明らかになった。

2. 森林の遺伝的系統調査と伝統知による価値創造

九州北部豪雨災害被災地の英彦山には、古代より修験道に基づく霊木信仰が存在する¹。この霊木信仰にかかる森林の文化的価値を科学と芸術を通して再考し、復興感を喚起する「物語」と価値創造に結びつける。

(1) 英彦山霊木群の遺伝子分析と被災霊木による作品制作

英彦山分水嶺の水源・英彦山は修験道の霊域である。木は神仏の依代とされ、江戸期まで伐採・持ち出しを禁ずる山中法度であった。英彦山のスギ霊木群は遺伝子の独自性をもつ可能性があり、

人為的に維持管理されていたことが九州大学農学部教授・渡辺敦史の科学的調査で示されている²。九州の在来スギは氷期に絶滅したとされ、その由来は謎とされてきたが、渡辺のゲノム解析により英彦山「鬼杉」(樹齢1200年)群は在来種の可能性が高いことがわかった。修験道の霊木信仰が、森林の遺伝子系統保全に貢献したと考えられる。英彦山は度重なる自然災害に加え、明治期の廃仏毀釈の破壊によって文化的価値を伝える仏教遺物が少ない。そこで、英彦山の霊木信仰に関わる被災木(鬼杉落枝、千本杉)による信仰対象《鬼杉不動》(2022年)、《鬼杉不動童子》(2024年、図10)を制作した。これらを英彦山神宮下津宮に奉納し、本作品素材の物語(遺伝子の希少性、修験道文化、災害からの再生)を伝える報告会を開催する(2025年3月)。



図10 知足美加子《鬼杉不動童子》2024年

(2) 災害被災木による楽器制作

英彦山千本杉の倒木を用いて楽器カリンバを制作した(図11)。来年度、台湾師範大学との合同ワークショップにおいて、九州北部豪雨災害被災木(スギ)でカリンバを制作し、曲を演奏する動画を被災地に届ける。



図11 《カリンバ(英彦山千本杉)》2025年

3. 朝倉三連水車を未来につなぐ文化継承の森づくり

朝倉市の三連水車1基と二連水車2基は、江戸時代の寛政元年(1789)から約230年間稼働する日本最古級の農業用木製水車である。豪雨災害発災後1ヶ月で稼働し、被災者の心を励まし「復興のシンボル」となった。水車群は5年毎に造り替えられるが、費用の約3割を受益者(農家)が担っており、その負担は重い(図12)。ウッドショック等による素材高騰に加え、マツ材線虫病蔓延によってアカマツ(中心軸)の調達が困難な状況が続いている。そこで、文化継承に必要な木材(アカマツ、カシ、シュロ等)を育成する「三連水車を未来につなぐ文化継承の森づくり」プロジェクトを朝倉市に提案した。協議の結果、小石原川ダム横のコア山の一部で試験的な森づくりを行うこととなった。現在、渡辺敦史研究室の協力のもと、英彦山、黒川地区の在来種実生苗、球果、挿木枝を採取し植栽準備を進めている。さらに三連水車の3

1 拙稿「英彦山修験道における自然信仰と森林文化再考—鬼杉落枝と千本杉による不動明王像制作—」日本山岳修験学会『山岳修験73』岩田書院2024年 pp. 19-35

2 渡辺敦史「霧島神宮スギ御神木と英彦山神宮に残るスギ古木群の由来からみたスギ植栽に対する思想の相違」『山岳修験74』岩田書院2024年 pp. 73-88

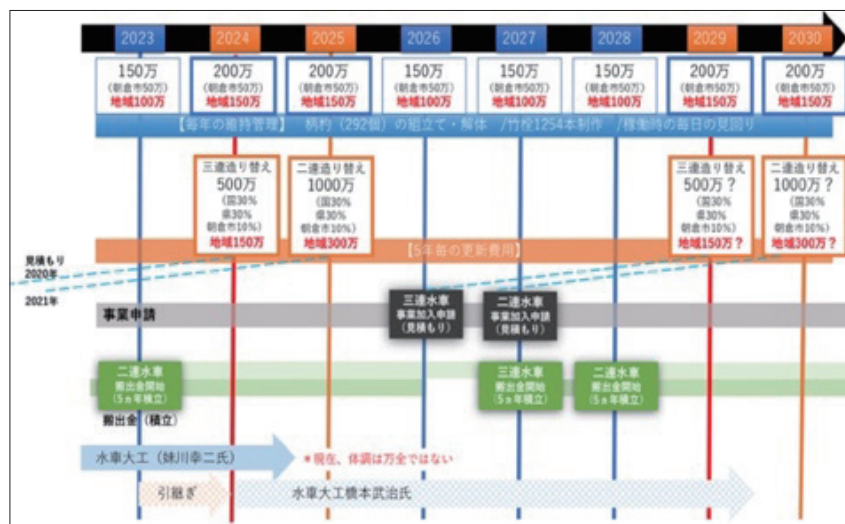


図12 「三連水車群の運営予算」筆者作成(協力:山田堰土地改良区)2023年

Dデータを取り(協力:井上朝雄研究室)1/40立体模型を制作した(図13)。また、山田堰から水車までの水の流れを可視化するCG動画を制作した(図14)。これらは水車大工の技術伝承、および自然エネルギーを利用する水車のSDGsの価値を再評価し、次世代の教育に役立てるものである。〈JSPS 科研費24K00031の助成〉



図13 「朝倉三連水車1/40模型」(協力:永江春紀)2024年



図14 「朝倉三連水車のしくみ」(協力:馬江陵)2024年

https://youtu.be/xvWYG5_6FQg?si=MFQo1lw4Dxb6eY6

*これらの詳細な活動報告は復興支援サイト「MILL」に記載(<https://mill-triple.com/posts/asakura2024>)



担当教員:

知足 美加子(とまたり みかこ)

九州大学芸術工学研究院教授 博士(芸術学)／筑波大学大学院芸術研究科彫塑コース修了／青年海外協力隊美術隊員 コスタリカ共和国派遣／国画会彫刻部会員 日本山岳修験学会理事／自然とアートをテーマに復興支援活動等を行う

4. サンゴの生命の樹プロジェクト

ーサンゴを育む間伐材の苗床の提案ー

気候変動の影響は海にも及んでいる。静岡県沼津市の内海湾では造礁性サンゴのエダミドリイシの群集が1990年代には約5,000㎡存在していた。現在、海水温異常やガンガゼ(ウニの一種)による食害等により総面積は2.3%ほどに減少し、2023年にはサンゴの白化現象が起こっている。そこで、サンゴを育成する苗床をつくる「サンゴの生命の樹」プロジェクトを提案している。沼津市特産の



図15 「ミカンの木とサンゴの予備実験」(協力:朝倉一哉)2025年

ミカンの間伐材を用いて、サンゴを育成する樹形苗床とし、サンゴを育む森づくりを行う。海の豊かさのためには森林からの栄養分が必要であることから、この樹形苗床によって森林と海の繋がりを可視化する。海面下に美しいサンゴの森が広がることを市民にイメージさせることによって、環境保全への意識を高めネイチャーポジティブを目指す。安田仁奈(東京大学)、朝倉一哉(平沢マリンセンター)らの協力により、内海湾でミカンの木や竹、漆喰等へのサンゴの活着の予備実験を実施している(図15)。〈JSPS 科研費24K00079の助成〉

Project

2

婚姻制度によりそう展

期間／2024年6月18日～7月1日 場所／筑紫野市生涯学習センター1階 多目的ホール @筑紫野市男女共同参画ぶちフェスタ
期間／2024年10月20日 場所／福岡市 ソラリアプラザ1階 @人権啓発フェスティバル「ハートフルフェスタ福岡 2024」

私たちにとって身近な婚姻制度は、本当に私たちの生活に寄り添ったかたちをしているのでしょうか？日本や世界の婚姻制度を知り、考えてみるきっかけを生み出す展覧会です。

福岡市が主催した人権啓発フェスティバル「ハートフルフェスタ福岡 2024」と筑紫野市が主催した男女共同参画ぶちフェスタにて展示を行った。

今年度の活動



Project

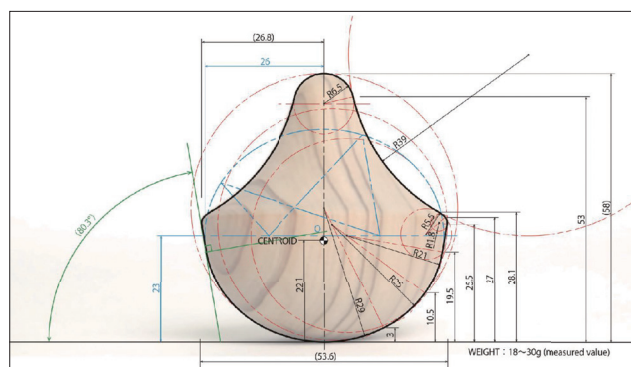
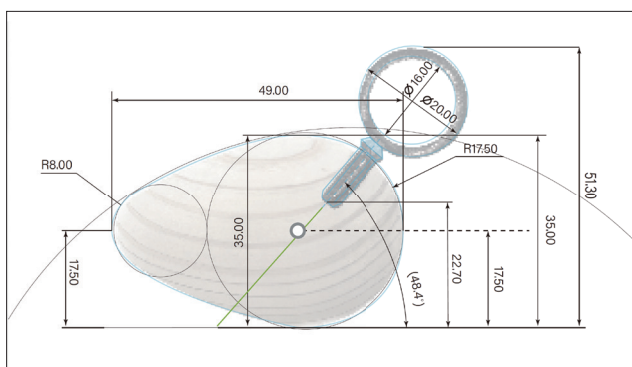
3

木育サミット in 福岡あさくら

九州大学復興支援団の一員として行ってきた、朝倉市で生まれた赤ちゃんに贈る“あさくら杉おさがりこぼしファーストトイ事業”が、木育サミット in 福岡あさくら (2024. 11. 30) において、ウッドスタート事業に展開していった。そこで、これまでの開発経緯やデザインの内容、事業の報告を行った。また、おさがりこぼし事業の次の展開として、ボードホイッスルの新しいデザインが紹介された。

<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/uploaded/attachment/236975.pdf>

今年度の活動



担当教員:

尾方 義人 (おがた よしと)

大きな会社で働いたあと、小さなデザイン事務所で修行して、大学で働き始めました。とにかくずっとデザインしています。神戸 福岡 東京 名古屋 岡山 大阪 福岡とあちこちで暮らしましたが、今では福岡での生活が1番長くなりました。けれども、関西弁はぬけません。

認知症ケアの場における芸術活動

認知症ケアの場において、即興的で共創的な芸術活動は、認知症本人や介護者にポジティブな効果をもたらすと言われています。そこで2020年から、ラボラトリオ株式会社、NPO法人ドネルモと共同で、芸術活動が変化を生み出す仕組みや効果的な活動のデザインについて研究を行っています。

1. 研究会

福祉領域での芸術活動に詳しい有識者を招き、研究チームのそれまでの研究成果や、これから実施する調査の方向性について意見をうかがうオンライン研究会を実施しました。

アーティスト向けサポートブックの作成

認知症の方とのアートワークショップ(アートWS)に取り組んでみたいと考えているアーティストやコーディネーター向けのサポートブックα版を作成した。研究会で意見交換を行い、年度末にβ版を完成させた(A4、カラー、24p、構成:出会い編、準備編、実践編、振り返り編)。

●研究会日時:2024年8月26日(月) 17:00-19:00

多面的評価フレームワークの開発

認知症ケアの場における芸術活動の多様な効果の可能性を構造的に示したマップやロジックモデルを作成した。研究会で意見交換を行い、アップデートした。

●研究会日時:2024年11月28日(木) 13:00-15:00

文化と福祉の間の障壁に関するアンケート調査

福祉セクターを対象としたアンケート調査(予備調査と本調査)を実施した。研究会で中間結果を報告し、意見交換を行った。

●研究会日時:2025年2月10日(月) 17:00-19:00

2. アーティスト支援プログラム

将来的な実践の機会創出を目指し、アートWS実践経験があり、認知症分野に興味・関心を持っている福岡近隣のアーティストと、アートWSの実施経験や関心のある認知症介護施設関係者との相互理解とつながりづくりのためのWSを実施しました。

第1回 イントロダクション

日時:2024年8月1日(木)19:00-20:40

場所:オンライン会議システム Zoom

内容:ワークショップ参加者(アーティスト)同士の顔合わせと、認知症介護施設管理者による認知症の基礎講座を実施した。

第2回 アートWSの実際

日時:2024年8月6日(火)13:00-16:00

場所:九州大学大橋キャンパス 7号館1F シアタールーム

内容:過去に認知症介護施設で実施したアートWSの動画や、実践経験のあるアーティストによるアートWSを体験し、ケアの現場におけるアートWSについて考えた。



アートWSの手法や認知症当事者との関わり方などを意見交換

第3回 企画検討会

日時:2024年9月23日(月祝)14:00-17:00

場所:九州大学大橋キャンパス デザインコモン 2F

内容:参加アーティストが企画したWSを試演。介護施設関係者や研究チームも集まり、意見交換を行うとともに、アーティストと介護施設関係者のつながりづくりを行った。



楽器を使ったアートWSを実施し、即興で曲づくり

3. 成果発信

研究成果を広く一般に紹介し、議論することを目的にシンポジウムを開催した他、国際ジャーナル等への論文掲載を行いました。

シンポジウム

テーマ:共創するケア～認知症ケアの場におけるアートの可能性

日時:2025年3月8日(土) 14:00-17:00

場所:九州大学大橋キャンパス デザインコモン 2F
(Zoomとのハイブリッド)

論文・新聞記事

- Mia Nakamura, Kanako Sejima, Kana Sakurai, Yosuke Nagashima & Yaya Yao (2024). Addressing causality: participatory evaluation on improvisational drama workshops for people with dementia and their carers, *Cultural Trends*, DOI: 10.1080/09548963.2024.2402863 (日本語版を本紀要に掲載)
- 中村美亜(2024)「認知症ケアの場での共創的即興演劇ワークショップ」*老年精神医学雑誌*35:206-210.
- 中村美亜「随筆喫茶:認知症とアート」(西日本新聞 2024年6月9日朝刊)

ウェブサイト

<https://sites.google.com/view/arts-dementia>



担当教員:中村 美亜 (なかむら みあ)

九州大学大学院芸術工学研究院未来共生デザイン部門教授、博士(学術)。専門は文化政策・アートマネジメント研究。芸術が人や社会に変化をもたらすプロセスや仕組みに関する研究、またそれを踏まえたケア、社会包摂、評価に関する研究を行っている。訳書に『芸術文化の価値とは何か』、編著に『文化事業の評価ハンドブック』、単著に『音楽をひらく』など。日本評価学会認定評価士。

身体表現演習特講〈学部〉 アーツマネジメント特論〈学府〉

担 当 教 員:長津 結一郎

学 外 ゲ ス ト:兼島 拓也、中垣 忠子、酒井 咲帆

対話的な演劇の鑑賞体験を構成し、社会的な課題を考える機会を提供する。このことは文化政策を考える上で重要な課題だと言えます。そこで、福岡県久留米市にある久留米シティプラザのユースプログラム「新しい演劇鑑賞教室」に参画する授業を実施しました。

学外から参加した大学生らとともに、沖縄をめぐる歴史的事実に着想を得た兼島拓也さん作の演劇『ライカムで待っとく』を実際に鑑賞し、対話をするプログラムでした。イントロダクションでは、参加者が自己紹介や「他人ごと、自分ごと」をテーマに議論し、多様な価値観を共有しました。続くプレレクチャーでは、地域課題に取り組む方々のゲスト講演に耳を傾け、生活圏内の問題を「自分ごと」として捉える重要性について考える時間を持ちました。演劇『ライカムで待っとく』の上演を通じて、沖縄の問題に対して、一言では片付けることのできない複雑な現実が浮き彫りになる作品を体験する機会を得ました。終了後の対話の時間では、「演劇が観客に迫る力」や「他人ごとを自分ごとに変える難しさ」について意見が交わされました。最後に作者の兼島拓也さんが「作品は観客とともに完成する」と語り、参加者と交流を深めました。最後は授業の受講者だけで集まり、以上の「新しい演劇鑑賞教室」での経験を、鑑賞体験を仕掛ける側の視点で振り返り、架空の演劇を題材にして、対話や鑑賞を盛り上げるために何が必要なのかを考えてもらいました。

回	テーマ	担当講師
1	イントロダクション	長津結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院)
2・3	プレレクチャー 「劇場で考える～他人ごと・自分ごと」	酒井 咲帆(株式会社アルパス 代表、いふくまち保育園・ごしょがだに保育園 園長) 中垣 忠子(東国分校区 池の谷自治会 会長) 長津結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院)
4・5・6	「ライカムで待っとく」鑑賞と対話	兼島 拓也(劇作家、脚本家) 長津結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院)
7・8	鑑賞体験の振り返り、鑑賞をデザインする	長津結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院)

対象者:芸術工学部・大学院芸術工学府全専攻

受講人数: 9 名

日程:2024年春学期

連携:久留米シティプラザ



久留米シティプラザ連携



担当教員:

長津 結一郎

(ながつ ゆういちろう)

九州大学大学院芸術工学研究院未来共生デザイン部門准教授、博士(学術・東京藝術大学)。専門はアーツマネジメント、文化政策。芸術活動を通じて新たな関係性が生まれる場に伴走／伴奏しながら、研究や実践活動を行う。著書に『舞台の上の障害者 境界から生まれる表現』(単著。九州大学出版会、2018年)など。

Course
2

スタジオプロジェクト I-B、II-B 「ホールマネジメントエンジニアリングプロジェクト」〈学府〉

担当教員: 尾本章、長津 結一郎、リシェツキ 多幸
学外ゲスト: 扇谷 泰朋、山下 大樹、細川 泉、宇野 健太
アシスタント: 久田 芙美(九州大学芸術工学部事務補佐員)

本学府では、様々なコースの学生が課題解決にむけて集まる科目「スタジオプロジェクト」を開講しています。2024年度開講のスタジオプロジェクト科目の一つ「ホールマネジメントエンジニアリングプロジェクト」では、近年劇場における情報保障などが行われるコンサートの機会が増加していることに着目し、音源に残響を付加する「響きの補償」の技術を用いたコンサートのあり方を学生主体で考案しました。音響福祉工学に関する文献調査や仮想企画の考案のあとは、実際にコンサートを企画。九州交響楽団メンバーによる弦楽四重奏の演奏を「音場再生技術」を用いてホール外に再現し、聴衆と音楽がホールの内外を旅する実験的なコンサートを開催しました。

コンサートのタイトル「Auditorium Journey〜九響と行く音の旅〜」も学生主体で考えたものでした。Auditorium(オーディトリウム)とは、パフォーマンスを見たり聴いたりする場所のこと。弦楽の響きに乗せて、普通とはちょっと違う音の旅、Journey(ジャーニー)に出発する、ということを意図しました。

回	テーマ	担当講師
I-B	1 ガイダンス、レクチャー 「劇場アクセシビリティについて」	長津 結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院)
	2 文献調査	
	3 レクチャー・体験 「音響福祉工学について」	尾本章(九州大学大学院芸術工学研究院)
	4・5・6 グループでの企画考案	尾本章、長津 結一郎、リシェツキ 多幸(九州大学大学院芸術工学府非常勤講師／九州交響楽団)
	7・8 企画発表、講評、企画書の作成	尾本章、長津 結一郎、リシェツキ 多幸
II-B	9～14 コンサート運営のための実務 (演出・技術・制作のグループに分かれて作業)	尾本章、長津 結一郎、リシェツキ 多幸
	15 本番	扇谷 泰朋(九州交響楽団ソロ・コンサートマスター)、山下 大樹(九州交響楽団第2ヴァイオリン首席奏者)、細川 泉(九州交響楽団ヴィオラ首席奏者)、宇野 健太(客演・チェロ奏者) 尾本章、長津 結一郎、リシェツキ 多幸
	16 振り返り	尾本章、長津 結一郎、リシェツキ 多幸

対象者: 芸術工学部・大学院芸術工学府全専攻

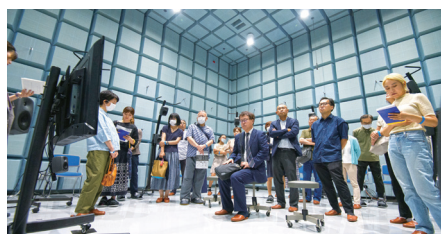
協力: 公益財団法人九州交響楽団

助成: 科学研究費補助金 JP21H03764、JP24K03222、令和2年度大学改革活性化制度「福祉と音響工学との連携を通じた芸術工学の発展「音楽の場と人間との関わりに着目した文理融合型研究」

受講人数: I-B=22名、II-B=16名

後援: 福岡市

日程: 2024年前期



撮影: 富永 亜紀子



担当教員:

尾本章

(おもと あきら)

九州大学大学院

芸術工学研究院

音響設計部門教

授、博士(工学・東

京大学)。専門は応用音響工学。様々な

音場の計測・評価・制御・再現などを通して、最終的に良い音にたどり着く研究を目指している。2021年10月より、九州大学芸術工学研究院院長及び九州大学副学長。

担当教員:

長津 結一郎(ながつ ゆういちろう)

→ P59参照

スタジオプロジェクトⅢ-B、Ⅳ-B 「ホールマネジメントエンジニアリングプロジェクト」〈学府〉

担当教員:尾本章、長津 結一郎

学内ゲスト:港 岳彦、Sasa/Marie、梶 大也

学外ゲスト:鈴木 玲雄、鈴木 久晴、仁比 峻輔、金箱 淳一、河合 拓始、上野 ゆみこ、内田 遼、

渡邊 梨乃・穂田 誠・久住 文華・徳田 貴昭・池田 鈴(福岡県聴覚障害者協会青年部)

アシスタント:眞崎 一美(九州大学大学院芸術工学府テクニカルスタッフ)、久田 芙美(九州大学芸術工学部事務補佐員)

九州大学大学院芸術工学府では、様々なコースの学生が課題解決にむけて集まる科目「スタジオプロジェクト」を開講しています。2024年度開講のスタジオプロジェクト科目の一つ「ホールマネジメントエンジニアリングプロジェクト」では、近年増加している、劇場における情報保障などを通じ福祉的な配慮を行ったコンサートについて考案することを目指しました。音響工学や音楽、メディアデザイン等を専門とする大学院生が中心となって、聴覚障害のある人に向けた、コンサートでの多様な情報保障を実験し、演奏後には公開講座の形式で、情報保障の未来について話し合いました。今回のコンサートでは、音がきこえる人もきこえない人も一緒に音楽を楽しめるようにするにはどうすればいいのか、福岡県聴覚障害者協会青年部と協働しながらともに考え、最終的には現代音楽の新しい鑑賞方法を体験しました。

回	テーマ	担当講師
Ⅲ B	1 映画『ぼくが生きてる、ふたつの世界』から聴覚障害を考える	港 岳彦(九州大学大学院芸術工学研究院) 長津 結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院)
	2 ガイダンス	尾本章、長津 結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院)
	3 福岡での聴覚障害のある人たちの活動	鈴木 玲雄(福岡県聴覚障害者協会/キコエナイ×キコエル発展事業委員会)、福岡県聴覚障害者協会青年部
	4 ワークショップ「聞こえないの体験」	Sasa/Marie(サイン・ポエット)
	5 テクノロジーからのアプローチ	鈴木 久晴、仁比 峻輔(エヴィクサー株式会社)
	6 ディスカッション	長津 結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院)
	7 共遊楽器の創作からのアプローチ	金箱 淳一(楽器インターフェース研究者、神戸芸術工科大学)
Ⅳ B	8～13 情報保障方法の考案	尾本章、長津 結一郎、鈴木 玲雄、福岡県聴覚障害者協会青年部、Sasa/Marie
	14 リハーサル	河合 拓始(作曲家、ピアニスト)、尾本章、長津 結一郎、鈴木 玲雄、福岡県聴覚障害者協会青年部、
	15 本番	河合 拓始、上野 ゆみこ(打楽器奏者)、内田 遼(トロンボーン奏者)、梶 大也(オーボエ奏者)、尾本章、長津 結一郎、鈴木 玲雄、福岡県聴覚障害者協会青年部、Sasa/Marie
	16 振り返り	尾本章、長津 結一郎

対象者:大学院芸術工学府全専攻 受講人数:12名 日程:2024年後期 協力:福岡県聴覚障害者協会青年部 後援:福岡市
助成:一般財団法人曾田豊二記念財団、科学研究費補助金 JP21H03764、JP24K03222、JP23K17491、JP23K25142



第5回
字幕メガネを体験中



第7回
金箱さんの講義を受けている様子



第11回
楽器に触れて音を感じている様子

担当教員:尾本章(おもと あきら)→ P60参照 担当教員:長津 結一郎(ながつ ゆういちろう)→ P59参照

創造農村デザイン演習〈学部〉 創造農村デザイン応用演習〈学府〉

担当教員: 朝廣 和夫、長津 結一郎、野村 久子

学外ゲスト: 小森 耕太、武田 力、石田 絵里香

スタッフ: 眞崎 一美

ティーチング・アシスタント: 宮寄 陽大

中山間地域などの農村社会には、豊かな自然と地域が育んできた文化がある一方で、少子高齢化や過疎化を含む様々な課題が山積しています。そのようななか、農とアートのあるライフスタイルを基盤とした包摂型地域づくりを実践しているエリアを対象とし、学生が主体的に農村の自然、文化、その特徴と課題に触れ、包摂的社会に関する具体的な取り組みの在り方を学ぶ臨時授業科目として開設しました。この科目2022年度より農学研究院とも連携して実施されています。

合宿は三日間にわたって行われ、多彩な活動を通じて地域と深く関わる機会となりました。

初日は、地域で毎年行われる恒例のイベント「唄って踊って味わう八女茶山」に全員で参加しました。伝統的な民謡や、2019年のソーシャルアートラボプロジェクトで制作された踊りを地域住民の皆さんとともに披露し、地域の文化を体感しました。2日目は、午前中に農作業のボランティアとして、らっきょうの定植に挑戦し、棚田の見学を行いました。午後は、武田力さんのアートワークショップに参加し、「エターナル・コール」という作品を制作しました。この作品では、散歩をしながら思い出が蘇る場所を選び、そこでの物語を語り、録音し、写真を地図にマッピングしました。参加者は山や神社、川など、思い思いの場所で個性豊かな作品をつくりあげました。最終日は、全員で制作した作品を鑑賞し、地域の中でゆったりと過ごす時間を共有しました。こうした農作業と芸術活動の実習を通して、農村文化を継承・伝達するための仕組みを学生の目線で考えました。

回	テーマ	担当講師
1	オリエンテーション・イントロダクション	朝廣 和夫・長津 結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院) 小森 耕太(NPO法人山村塾)・武田 力(演出家、民俗芸能アーカイバー)、石田 絵里香(関西大学大学院)
2	NPO法人山村塾での合宿研修 (農とアートのフィールドワーク)	朝廣 和夫・長津 結一郎(九州大学大学院芸術工学研究院)野村 久子(九州大学大学院農学研究院)小森 耕太(NPO法人山村塾)、武田 力(演出家、民俗芸能アーカイバー)、石田 絵里香(関西大学大学院)

対象者: 芸術工学部2年以上、農学部、大学院芸術工学府全コース、大学院生物資源環境科学府

受講人数: 8名 日程: 2024年夏学期



担当教員:

朝廣 和夫(あさひろ かずお)
九州大学大学院芸術工学研究院環境設計部門教授、博士(芸術工学)。専門は緑地保全学。九州芸術工科大学環境設計学科、大学院卒業。里地・里山保全の教育研究に従事。書籍『よみがえれ里山・里地・里海』などを共著。「災害後の農地復旧のための共助支援の手引き」を公開。

全の教育研究に従事。書籍『よみがえれ里山・里地・里海』などを共著。「災害後の農地復旧のための共助支援の手引き」を公開。



担当教員:

野村 久子(のむら ひさこ)
九州大学大学院農学研究院附属国際農業教育・研究推進センター准教授、博士(学際)。英国・マンチェスター大学博士課程修了。専門は開発学、農業経済学、環境経済学。持続可能な資源の利用と管理、持続可能な農業の実践とその適応についてエビデンスに基づく政策評価や政策提言につながる研究を行う。

担当教員:

長津 結一郎(ながつ ゆういちろう)
→ P59参照